

I 導入部

会堂にお集まりの皆さん、おはようございます。オンラインでの礼拝に参加しておられる皆さん、おはようございます。浦和教会の皆さん、おはようございます。イースター、イエス様の復活おめでとうございます。先週私たちは受難週を送り、金曜日はイエス様の十字架の苦しみを特に覚えて過ごしました。イエス様は、死んで墓に葬られましたが、三日目によみがえり、罪と死に勝利されたのです。イエス様の十字架の死と復活を信じる私たちは、罪の赦しと魂の救い、死んでも生きる命、復活の命が与えられることを今日のイースター礼拝を通して、さらに確信したいと思うのです。今日は、全世界のキリスト教会の礼拝で、イエス様の復活の喜びがささげられています。

さて、二人三脚というのは、「二人三脚とは、2人が隣り合わせになり、隣同士の足を結んで歩く競技で、主に2人の協調性と歩調の一致が求められる競技です。二人三脚は、コミュニケーションと相手への配慮が不可欠な競技です。「二人三脚で相手の動きを感じ取る」、「二人三脚でペースを調整する」など、二人三脚は相手と密接に連携することが求められる競技として知られています。」と説明されています。信仰生活とは、イエス様との二人三脚、相手であるイエス様との間で、動きを感じ取ることであり、私たちが、イエス様と密接に連携する歩みとなるのです。今日は、ルカによる福音書 24章 25節から 35節を通して、「イエス様と二人三脚」と題して、復活の日、エマオに向かう二人の間に割って入ったイエス様との様子を見たいと思うのです。

II 本論部

一、聖書、神様の言葉に心を受けて

今日は 25節から選ばせていただきましたが、13節から 24節の箇所を少し説明します。イエス様は朝復活されました。復活のイエス様に出会った女性たちは、イエス様の復活を弟子たちに話しましたが、弟子たちは信じませんでした。聖書には、「使徒たちは、この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった。」(ルカ 24:11) と記しています。ペトロは女性たちの話を聞いて墓に行きましたが、墓には亜麻布しかないことを不思議に思いながら家に帰りました。その日二人の弟子、一人はクレオパですが、エルサレムからエマオに向かって歩きながら、イエス様が復活したという女性たちの話を論じ合っていると、イエス様が二人の間に入って歩き始めましたが、二人の目が遮られていてイエス様だとはわかりませんでした。イエス様は、何のことを話しているのかと尋ねると二人は暗い顔をして、エルサレムで起こったことを知らないこと驚きました。イエス様が、「どんなことか」尋ねると、ナザレのイエスのことで、神と民衆の前で、行いにも言葉にも力ある預言者で、イスラエルを解放してくれると望みをかけていたが、祭司長たちや議員たちが、十字架につけてしまった。しかし、三日目になって女性たちが、「イエスは生きておられる」と告げたので、何人かが墓に行くとイエス様の姿がなかったと話したのです。

25節、26節には、「そこで、イエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く

預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」とあります。リビングバイブルには、「ああ、どうしてそんなに、ものわかりが悪いのですか。預言者たちが聖書（旧約）に書いていることを信じられないのですか。キリストは、栄光の時を迎える前に、必ずこのような苦しみを受けるはずだと、預言者たちは、はっきり予告したではありませんか。」とあります。

イエス様は「物分かりが悪く、心が鈍く」と言われました。イエス様は、少なくとも3度は、自分が捕らえられ苦しめられ、十字架について死に復活をするということを弟子たちに語っていました。クレオパともう一人の弟子は、「わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。」(ルカ 24:21) と言い、イエス様が政治的にイスラエルを解放する力ある救い主としか見ていなかったのので、イエス様の十字架の死と復活の話をもとに聞いておらず、聞いていても受け入れたくはなかったのです。弟子たちは、イエス様の言葉や聖書の言葉を大切にしないで、自分たちの思い、自分たちの望みばかりを優先していたので、イエス様が話されるご自分の苦しみと栄光、十字架の死と復活を信じる事が出来なかったのです。ですから、イエス様は、「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く」とため息をつかれたのでしょうか。27節には、「そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。」とあります。イエス様は、御自分の復活の体を示したのではなくて、聖書に示している救い主であるご自分のことを話されたのです。イエス様は聖書、神様の言葉に忠実に従って生きたお方であり、聖書の言葉、神様の言葉をとっても大切にされたのです。私たちキリスト者も聖書の言葉、神様の言葉を信じ大切にしています。しかし、実際の具体的な生活の中で、聖書の言葉、神様の言葉を信じているかどうかは、別の事なのかも知れません。私たちが復活し生きておられるイエス様に出会い続けるのには、聖書の一部ではなくて、聖書全体からの解き明かしが必要なのでしょうか。日々聖書に触れ続ける者でありたいのです。

二、見えるものではなく、聖書、神様の言葉に信頼を寄せて

28節、29節には、「一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。」とあります。イザヤ書55章6節には、「主を尋ね求めよ、見いだしうるときに。呼び求めよ、近くにいますうちに。」という言葉があります。リビングバイブルには、「尋ねることのできる間に神様を探し求めなさい。近くにおられる間に呼び求めなさい。」とあります。クレオパともう一人の弟子は、イエス様がまだ先に行こうとされたのですが、イエス様とは知らない誰かですが、後でイエス様の聖書の解き明かしを聞いて、「心は燃えていた」とありますから、この人ともっと話したい。聞きたいという思いがあったので、「尋ねることのできる間に神様を探し求めなさい。近くにおられる間に呼び求めなさい。」とみ言葉にあるように、イエス様を無理に強引に引き留めて、共に泊るために家に入ったのです。私たちも、もっと話したい、交わりたいと願う人が帰ろうとすると引き留めるのではないのでしょうか。30節、31節には、「一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエス

だと分かったが、その姿は見えなくなった。」とあります。「イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。」というのは、パンをさく人が主人なので、イエス様が主人となった、イエス様に主導権を渡したということです。二人はイエス様を主人として迎えたということでしょう。イエス様が主人となられる時に、イエス様が、神様が働いて下さるのです。だから、「すると、二人の目が開け、イエスだと分かった」のです。今までイエス様と気がつかなかった二人は、イエス様を主人として受け入れ、主導権を渡した時、イエス様をイエス様として見て、認めることができたのです。信仰が回復したと言えるでしょう。イエス様を信じたので目が開かれたのです。しかし聖書は、「その姿は見えなくなった。」と語ります。ずっと共に歩いてきた人が、無理に引き留めた人がイエス様だとわかった瞬間に、イエス様の姿は見えなくなったのです。何と、イエス様は薄情な方だと思えるような。「神様もう少し二人とイエス様を交わることができるようにして下さい」、と祈りたくなるような感じです。しかし、イエス様を信じた二人には、イエス様が見える存在としては必要なくなったということなのでしょう。イエス様を信じたので、目が開かれてイエス様を見ることができた二人は、イエス様が見える方として必要としないということなのです。私たちは、多くの場合、視覚によって、見えるということを確認します。私たちも、もしイエス様の姿をこの目で見ることができれば、信仰がもっともっと深まるのではないかと考えるのでしょう。もし、見えることが、見るものが大切ならば、イエス様は復活したご自分の体を見せて、手の傷を見せて、「ほら私だ」と示したらよかったです。しかし、そうはなさらなかったのです。イエス様は、「そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。」のでした。見えるものではなく、視覚による確信ではなく、聖書の言葉、神様の言葉による確信を大切にされたのです。奇跡が起こることはすごい事です。目の見えない人が、目が見えるようになる。耳が聞こえない人が聞こえるようになる。足の悪い人が歩けるようになる。死人が蘇る。奇跡は素晴らしいです。しかし、イエス様の奇跡を見た多くの人々は、信仰を持ってイエス様に従ったのではなく、「ホサナ。ホサナ、救って下さい」とイエス様のエルサレム入城を歓迎した群衆は、裁判でイエス様に対して、「十字架につけろ」と何度も叫んだのでした。イエス様も言われました。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」(ヨハネ 20:29) と。私たちは、私たちの身の回りで起こること、見えることに懸命になる、第一にするのではなく、聖書の言葉、神様の言葉を大切にして信仰生活を歩みたいと思うのです。

三、聖書、神様の言葉で心燃やされる

32節を見ると、「二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。」とあります。リビングバイブルには、「二人はあっけにとられながらも、「そう言えば、あの方が歩きながら語りかけて下さった時も、聖書のことばを説明して下さった時も、不思議なほど心が燃えたなあ」と言い合いました。」とあります。イエス様から聖書、神様の言葉を聞いて心が燃えていたというのが、復活されたイエス様に出会った印なのでしょう。クレオパともう一人の弟子は、期待していたイエス様が十字架で死んで悲しみの中にありました。復活のイエ

ス様が共におられ、一緒に歩いているのに、言葉を交わしているのに気がつかなかったのです。私たちの信仰生活においても、苦しみや悲しみ、痛み、絶望さえ経験することが確かにあります。人生の陰りの中で、共におられるイエス様、寄り添っていて下さるのに、イエス様に気づかないことがあります。失望で心の目が遮られているからです。しかし、そのような現実、苦しみや悲しみ、痛み、絶望を打ち破るようにして、復活のイエス様が語りかけて下さるのです。苦しみと悲しみ、痛みと絶望に支配されている心を、イエス様に心の王座を明け渡す時、指導権を自分からイエス様にお譲りする時、目が開かれて共におられる、寄り添っていて下さるイエス様を見ることができるようになります。信仰の目をもって、イエス様が確かにおられること、守っていて下さること、そばにおられることを感じ、信じていることができるようになるのでしょうか。失望の道を歩んでいたクレオパともう一人の弟子は、失望から向きを変えて希望の道へと歩み始めるのです。クレオパともう一人の弟子の目が開かれたのは、イエス様と共に食卓を囲んだ時でした。パンを割くイエス様の姿に、イエス様が十字架にかかれる前夜のパンを割くイエス様の姿が記憶にあったのでしょうか。

彼らが心が燃える体験をしたのは、自己満足の経験ではないでしょう。隣人のために、他者のために生きるようになる経験でした。33節から35節には、「そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。」とあります。クレオパともう一人の弟子は、失望して悲しみながら歩いてきた道のりを、急いで走るようにエルサレムに引き返して、エルサレムでイエス様の十字架の死のゆえに失望している仲間たちに、イエス様の復活の事実を伝えるのです。「イエス様は生きています」と自信を持って証言したのです。いや証言せずにはおれなかったのです。復活の希望を伝えられずにはおれない者にされたのですから。生きる希望と目的は、イエス様の十字架の死と復活を通してしか与えられないものなのです。イエス様は、私たち一人ひとりの罪人のために、罪がない清いお方であるのにも関わらず、私たち一人ひとりを愛して下さり、私たちの身代わりに十字架にかかり、父なる神様に裁かれ、尊い血を最後の一滴まで流し、肉体的な痛みを極みまでも経験して、御自分の体を贖いの供え物としてささげられた。死んで下さったのです。死んで墓に葬られましたが、三日目によみがえらされて罪と死に勝利されたのです。イエス様の十字架の死と復活を信じる私たちに、過去、現在、未来の全ての罪を赦し、きよめ、魂に救を与え、死んでも生きる命、復活の命、永遠の命を与えて下さるのです。私たちは、イエス様の十字架の死と復活、つまり福音をまだ神様の愛と救いを知らない多くの人々に伝えたいのです。いや伝えずにはおれない者とされていることを覚えて、信じて、あらゆる機会とあらゆる方法を通して、神様に愛されている事実、福音の恵みを語りたいたいのです。

Ⅲ 結論部

「**イエス様と二人三脚**」という題ですが、今日の話では正確に言えば、「**イエス様と三人四脚**」です。三人四脚とは、「三人四脚とは、3人が横一列になり、両端の人の外側の足と真ん中の人の両足を結んで歩く競技で、主に3人の協調性とバランス感覚が求められる競技です。「三人四脚で体重を支え合う」、「三人四脚で進む方向を確認する」など、三人四脚

は3人が互いの役割を理解し、全体のバランスを保つことが求められる競技として知られています。」と説明されていました。私たちは、私とイエス様、そしてもう一人、祈りの援助者と共に、信仰生活を歩み、四人五脚、五人六脚と福音、十字架と復活を信じて神様の愛を知る人々と共に教会生活、信仰生活を歩みたいと思うのです。今日は第二礼拝後に、二名の洗礼式と1名の入会式が行われます。イエス様の復活を記念するイースター礼拝での喜びのしるしですね。3名の方々の信仰の歩みが祝福されるように祈ると共に、この週もイエス様と二人三脚で、三人四脚で、聖書の言葉、神様の言葉に触れて、心燃やされる週を歩ませていただきます。